

テーマ分担型発表と時間外の感想作成による授業参加と時間外学習(学びの実質化)

学校教育講座(教育心理学教室)・橋本 巖

### 1. はじめに・授業の位置づけと目的

同一授業における「単位の実質化の一環としての授業時間外学習の促進」に関連づけて授業評価・授業研究報告とするため，前年度に引き続き大学院授業「子どもの意欲と自己の形成」を取り上げて報告することにした。

本授業は大学院学校教育専攻における平成22,23年度のカリキュラム改革によって誕生した科目であり，共通基礎科目の一つとして，「子どもの発達と学習」領域に属している。シラバスでは，授業目的について「『生きる力』の育成を，『学びを通しての自己形成』という視点から捉え，学校での学びとその支援の過程における，〈学習－動機づけ－自己〉の関係性を教育心理学的な視点から考え，実践的な課題と関係づける。」としている。到達目標は主に，①授業スケジュール(本ページ右段)に示される授業のキーワードについて理解し説明できること，②授業や教育的活動を通して動機づけが喚起され，その学びを通して自己が意識化され形作られる過程について仮説的に説明できること，および，①②に基づいて，③授業への意欲を高める支援，学習がふるわない子どもの支援，授業や教育活動を通しての子どもの自己形成への支援について授業設計や個別的支援を意識できること，という3点である。

同時に，本授業は「学校心理士」資格関連科目(「教授・学習心理学」領域)として指定されているためもあり，例年，受験資格取得を目指す院生が他専攻からも受講している。本年度の評価対象となった受講者数(内訳)は，学校教育専攻1名(現職教員)，学校臨床心理専攻(臨床心理学コース)2名(うち1名が現職教員)教科教育専攻2名，計5名であった。学校心理士資格取得の希望者は3名程度であり，むしろ授業名やテーマへの関心を受講動機に挙げる院生がほぼ全員であった。

なお，平成28年度からは，教育学研究科の改組により教職大学院(教育実践高度化専攻)が設置され，それにともなって学校教育専攻は募集停止となる。カリキュラムの大幅な変更に伴い，本授業は平成27年度をもって廃止

となる。その意味では，本授業評価報告が，直接に次年度以降の同じ授業に反映され活かされるわけではないが，授業・教育の方法を考える上で示唆を少しでも引き出し，今後の実践に活かすことができればと考える。

### 2. 授業内容，および授業方法の工夫と評価

(1)授業内容 授業スケジュールのような内容系列をシラバスに示した。これらの内容系列のうち，下線を付したテーマ(授業回)は，受講者が関心に応じて発表役割を選択した回であり，後述のように，受講者による発表を中心とした授業回となる。

授業スケジュールの最初の数回部分は，授業趣旨の理論的位置づけなどの講義も必要とするため，筆者が担当する。また，受講者が選ばなかったテーマについては除外されるのではなく，担当者のいる回に一部を割り付け直したり，橋本が補講を行って，シラバスが意図した主要な要素(特に，学校心理士科目として指定された5事項：学習の心理学的理論，記憶と理解，動機づけ，学習指導と授業，学級集団とその組織化)についておさえた。

#### <授業スケジュール>

- 第1回 授業のガイダンス
- 第2回 わかろうとする子どもと学びの仕組み
- 第3回 わかろうとする子どもと動機づけ
- 第4回 興味・関心の形成と発達
- 第5回 体験活動からの学びと意欲その1
- 第6回 体験活動からの学びと意欲その2
- 第7回 人とのかかわりと学びの意欲その1
- 第8回 人とのかかわりと学びの意欲その2
- 第9回 学習の過程で自分と向き合う(個別指導)：  
自律的な学習方略とメタ認知，認知カウンセリング，学習不適應ほか。
- 第10回 自己の将来像や自覚化を目指した実践：  
将来の夢・目標(キャリア指導)と学習意欲
- 第11回～14回 自己概念，将来像を明確にし，  
自尊感情をたかめるための教育実践例の検討
- 第15回 総括的な議論：総括レポート作成指示

(2) 講義・演習の配列の改善 内容の理解を確

実にするため、受講者による発表の次の回を橋本による補講の日とするように日程を組み直した。受講者から寄せられた感想(後述)を配付してそれについて議論を促すほか、筆者による講義授業では、教授・学習心理学の講義と、関連する教育実践についての教育番組等のビデオ視聴を組み合わせた。さらに、授業導入期には「記憶と理解」あるいはメタ認知に関連して、筆者らの考案した文章理解に関連する実験課題を実習化し、「体験からの気づきと理解修正の関係」の解説に役立てた。授業テーマと発表及び補講の関連性・連続性を確保することを今期の改善点の一つとし、第4回～14回(系列組み替え後)にわたる11回連続で、受講者にはメールによる感想・コメント提出を義務づけた

(3) 授業評価方法：量的なアンケートは実施しなかった。評価のための情報としては第1に、受講者が担当した発表内容に対する感想・コメントのメール内容を用いた(今期の授業では11回。前年度は計5回であった。発表者自身も提出)。第2に、各自の発表とは別に、学期末に提出するレポート課題の1つとして、授業全般への感想を求め、シラバス等との関連で、授業内容・方法等の改善点の指摘を依頼した。本稿では、これらの感想を引用しつつ授業評価を試みた。

### 3. 時間外学習のカテゴリー化(試案)

昨年度(平成26年度)の本授業各回の感想分析により、各発表への感想・コメントの記述から、「授業時間外学習」として、次のような、理解のための思考や本授業に関する自的学習作業のカテゴリーが挙げられていた。以下の①、②、③が得られており、本年度の授業感想を分類・検討する上でも有益であると確認できた。

：① 文献に関して：当該発表での配布文献資料の読み直し / 本授業の以前の配布資料の読み直し / 自発的文献検索と紹介

② 他の回の授業・発表に関して：筆者(橋本)の解説・問いかけへの、時間をおいての自分なりの回答 / 筆者による講義や以前のビデオとの関連づけ / 自己の担当した発表と、今回の発表テーマとの関連づけ(分担したテーマの相互対比) / 前回の発表と今回の発表の関連づけ

③ 実践的場面・活動に関して：自己の教育

実習での授業経験や観察事例の想起 / 学校教育に関する他の大学授業等での言説との関連づけ / ビデオ視聴した実践事例への感想

非現職の場合、実習に関する記述があまり多くなく、かつあまり詳細でない場合が多かったが、協同学習に関連して自己の学習ボランティア(地域連携実習)と発表内容を往還させた次のようなコメントもあった：「支援に行っている小学校のある学級では、課題が早く終わった人は『ミニ・ティーチャー』として他の児童に考え方を教えに行く。先日、はじめは『ここは～のようにして考えるんだよ』とヒントを教えていたが、途中から『だから答えは～だよ』と答えを教えてしまっていた。協同学習を行う上での注意点として、教師が子どもたちに『教え方』を教えることも重要だと考えた。ただ、そのクラスは、支援が必要な児童もいるものままとまっている状態で、授業も集中して聞く児童も多い。親和的な雰囲気だと協同志向になること、『“分からない”から始まり教えあう』と資料でもあるが、このクラスもそうである」。

ただし、本年度や過年度の現職教員の感想を見ると、学校教師の態度や教育実践を省察したコメントがあり、これらに関して、今後、独自なカテゴリーが考案できるかどうか、検討の余地がある。例としては、「(興味形成との関連。電池接続の話)大人ほど今まで培ってきた既存の知識があり、ギャップも大きいため、驚いた反応やなぜという疑問のある様子がよかったと思います。自分は、この実験を小学校に持ち帰り、理科専攻の先生に聞いてみたが、やはり間違え、そのときの反応は大きかったです。しかし、あいまいだったもの、断片的だったものが、他の知識と結びつけられるのは早く、理由をすぐ考えついていました。また、周りの先生方はすぐ実験をしようと言いました。」等は、大学院での気づき・学びが学校の授業改善にすぐにつながる事例であろう。

また、自身の子育てを振り返った保護者としての視点も今後同様に再考の余地がある。自己の子育てについては、本年度、授業で得た知見から振り返って「長女も次女も、小学校からおもちゃを持って帰りました。棒の上に止まっている鳥を指で少し動かすと、そのはずみで鳥が幹をつつきながら降りてきます。帰宅すると食卓の上に誇らし気におもちゃが鎮座していました。そこで子どもに、もっときちんと声を掛けてやれば良かったと今にして思います(小学校教科書掲載の説明文からのおもちゃのきつつき作りを視聴して)」等がある。

また、授業で得た具体的な支援方法（たとえば認知カウンセリング）等について実践してみたいという動機づけの高まりや、放送・動画（TEDなど）というメディアを継続的に視聴するようになったことなどに関する記述は頻繁に見られた。本授業で紹介した実践家（菊池省三氏、金森俊朗氏）などの講演に出かけ、著作への興味発展なども、毎年見られている。これらは、子どもの意欲を高めることや子どもの自己形成（核になる関心形成や、自己制御学習など）という意味に真摯に向き合おうとする本授業への取り組みによって、受講者が自己課題や学習目標を明確化され、それによって必然的に授業時間外学習を促されている（自分なりの方向性を見出している）ということの意味すると思われる。

**4. 発表づくりの準備と支援：**受講者が選択したテーマについては、受講者が、文献を調べて発表するという「演習」形式をとる。しかし本授業では指定研究文献（図書）の分担ではなく「その日は担当者（受講者）に 授業をしてもらう」と伝えて、テーマについて広く学習して準備してもらう。発表は約 60 分を使い、実際に発問工夫やアセスメントのデモンストレーション、学校現場での実践例（現職の場合は自己の実践例）が提示されるなど、意欲的な発表になることが多い（通常パワーポイントが使用される）。

発表者は、準備のため、筆者と基本的に少なくとも1回 1コマ程度、授業時間外に打ち合わせを持つ。まず発表の 3 週間程度前に「文献相談」をする。これは発表の枠組み（主要な柱立て）をシラバスのキーワードと興味の在処に基づいて協議し、押さえるべき 文献を紹介・貸与する。文献リストづくりも課す。柱立てには、蓄積された 過年度のレジュメを参照してもらう。その後、ある程度プレゼン準備が進んだ際に必要に応じて 2 回目の相談に応じている。ビデオを貸与する等の支援もする。この2回の打ち合わせを通して、発表者は筆者と議論を重ね、結果的に概論的な解説も受けて、今度は各自がその内容をより深く理解し自分なりに工夫して、発表に挑戦する。

発表後の感想(期末レポート)として次のような反省もあり、指導上課題としたい：

「発表準備は、かなり余裕をもって打ち合わせをしていただいていたにも関わらず、後半に集中して作製することになってしまいました。1週間前に打ち合わせをしていただきま

したが、その打ち合わせがかなり盛り上がり、自分としてはとても充実したのですが、内容がかなり増えて、一週間でまとめるのが間に合わず、尻切れの発表になってしまいました。」等の反省もある。しかし、「この発表準備で追い込まれたこともあって、一気に知識が増え、考えが深まったように思います。」とも触れられている。

また、筆者にとっての「余録」であるかもしれないが、それぞれの発表準備のための打ち合わせの中では、受講者との個別面談になるため、各自の学習歴・実践歴や、関心の所在を聞くことができる。そのため、個別の興味の在処に従って発表する内容を選択したり、文献の読み方の支援をすることができた、と感じている。大学院の「情緒発達心理学特論」の授業でも一貫してそのような指導方法をとってきたが、時間的負担はあるものの受講者にとっても十分に指導を受けたという感想があったことを思い出す。

## 5. 総括

皆にとって関心の深い領域について、自分一人が分担して引き受け、新鮮な内容をわかりやすく提供し、自身が発表で受講者に伝えるというチャレンジが、必然的に、自発的な学習への姿勢を持たせ、また、授業後にもつながる新たな関心領域を獲得してもらうことに、本授業はある程度貢献し続けてきたのではないかと考えている。そのような意味で、受講者の「意欲と自己形成」に貢献できたとして自己評価したい。

一方、子どもたちを支援して意欲を引き出し、それが一過性でない自己の目標や核となる興味となっていくプロセスを教育者として院生がどう支援したらよいか、その過程を仮説的にでも言語化していく作業は、今後さらに筆者が取り組まねばならない研究・実践課題である。本授業は終了するが、ここで得た課題を引き続き、教職大学院での実践に活かしていきたい。現職教員対象の「レベルアップセミナー」や、共通必修授業「学校教育の今日的課題」では、「児童・生徒の意欲と自己」というテーマで、本授業の成果を情報発信してきた。今後も継続したい。